



発行：豊町東町会 編集：事務局広報部  
 お問い合わせ 豊町ふるさと会館 Tel & Fax 04-7169-1101

今号のご案内

- 夏祭りの様子
- 中・小学生のレポート
- 豊四季とかぶ

## 盛況だった夏祭り

### ●広い会場に市長さんも感心



納涼夏祭り大会は、8月17,18日に豊小学校校庭で開催されました。2日も好天に恵まれ、大勢の地域の人が繰り出して、恒例の“夏模様”を楽しんでいました。校庭をお借りしての開催は19回目。豊町東町会のお祭りは会場の広さが特色。来賓で訪れた秋山浩保柏市長も挨拶の中で「こんな広い場所で祭りができるなんてすばらしい」と、そのスケールの大きさに感心していました。

### ●ジャズ演奏に興奮

盆踊り、子供会の「柏元気太鼓」や和太鼓の御響、豊小の金管クラブの演奏など例年のイベント



に加え、今年は2日目に「Swing Beat Team♪HIROSHI」のジャズ演奏が。市民バンドながらマスターの石川広志さんはアメリカで修行したプロのミュージシャン。なつかしいスタンダードジャズから現在はやっている曲まで演奏され、司会者にのせ



られてマイクを握って歌ったり、リズムに合わせて踊りだす人も続出。いつになく会場は興奮状態に。

石川さんは市内の小学校などの楽器演奏クラブの指導もしており、豊小金管クラブの指導も行う予定とか。来年は、金管クラブ、柏元気太鼓とコラボしての演奏も実現するかも。

### ●模擬店はどこも行列

今年は、会場のレイアウトを変更し、雨が降っても水がたまりにくい図書館側に模擬店を「コ」の字型



に配置。各区、成年部、子供会、明寿会、消防団、おやじの会などが運営するお店はどこでも盛況。焼きそば、焼きとり、綿あめなどを買う人の長い行列ができ、早々と完売する店も。

今年も中原中、豊小の生徒、児童がボランティアとして祭りに参加、模擬店のお手伝いなどに汗を流してくれました。それ以外にもスポーツクラブの子供たちが仲間と一緒にお手伝いに参加してくれ、若い世代の活躍が目立つ祭りでした。

### ●南柏まつりでも披露

7月22日に行われた南柏まつりでも、日頃の練習の成果を披露。柏元



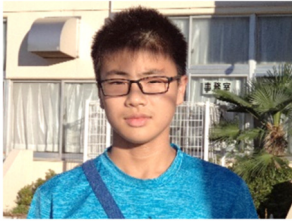
気太鼓は3, 5, 6年生の24人が「柏おどり」などの曲に合わせて、力強いバチさばきを。また、金管クラブは、4~5年生が「剣の舞」「ライジングサン」など素晴らしいハーモニーを聴かせてくれました。

## 若い目が見た夏祭り

### 中学生、小学生がレポート

豊町東町会の夏祭りは、8月17日、18日に行われ、盛況のうちに無事終了。今回は中原中と豊小の生徒、児童に祭りのレポートをお願いしました。

### ●興味深かった人の動き



中原中2年 宮内剛太君

8月17日の豊町東町会夏祭りの初日を見た。私は午後5時ごろ会場に行ったが、思っていた以上に人がいて驚いた。

よく見ると小学校の低学年ぐらいの子供が多く、夜おそくなると危険なので、早めに来ているのだろう。

6時ぐらいになると、おとなも増える。びっくりしたのは、模擬店のやきとりを買う人の行列だった。若い人から年寄りまで、さまざまな年代の人が30人から40人くらい長い行列をつくっていた。作業をする人も大変で、ボランティアでやきとりの屋台を手伝った友達も「同じ作業の連続で疲れた」と言っていた。



6時半ごろになると、中学生も増えてきて、同級生や友達に会えてとても楽しかった。抽選がはじまると、ステージの前にはたくさんの人が集まってとてもにぎやか。1等賞をとった人はとてもうれしそうな顔をしていたが、さて1等賞の中身は何だったのか？

今回は、屋台に並ぶ人、イベントに参加する人など、祭りの進行にしたがっての人の動きに興味を持って見る事ができた。とても楽しかったです。

### ●仲間になれる楽しさ



豊小5年 福島天司君  
豊小5年 松谷龍樹君

ぼくらは豊小で行われた東町会の夏祭りをしゅざいしました。たくさんのイベントがありましたが、いちばん印象に残ったのは、おみこしです。みこしをかついだ人に「なんでかつぐのですか」と聞いてみました。一つめ



の理由は「子供のころにかついだことがあって、みこしが好きだから」でした。もう一つの理由は「知らない人でも、いっしょにかつぐことで仲間や友達みたいになれるから」。ぼくもみこしをかついで、とても楽しかったので、この人の話はよくわかりました。夏祭りの思い出はまだまだあるけど、一番はみこしです。

## 今年も中学生がボランティア

### 屋台で汗を流してくれました

昨年につき、今年も中原中の生徒10人がボランティアとして祭りに参加してくれました。焼きそば、焼きとり、わた菓子などの模擬店は町会各区、成年部、老人クラブ、子供会など各団体が運営する完全な“手づくり”の屋台です。それぞれの屋台で、作る手伝い、販売の手伝いなどに汗を流してくれました。人気の屋台には例年通り長い行列ができます。



いままでは祭りには“お客”として楽しんできたボランティアたち。楽しさを提供する側に初めて立って、いろ

ろなことを学んだ様子でした。「たくさんの方が並んでいるので、作るのは大忙し。同じ仕事の連続で疲れてしまった」と言いながらも「地域の活動のことを初めて経験し、とても勉強になりました」と、地域の将来を担う若い人から頼もしい言葉が返ってきました。





## 赤山地下壕跡、野島崎灯台…

### 日帰りバスツアー

婦人部企画の日帰りバスツアー、今回は9月11日、39人が参加して、房総半島最南端の館山方面へ。館山市内にある館山航



空隊赤山地下壕跡は軍の防空壕の史跡。手掘りの跡も生々しい壕の中には、発電室、電信室などに使われたと思われる“部屋”のくぼみもあって、当時の歴史の一端を知る貴重な体験をしました。南房総市にある野島崎灯台は、明治2年開設の古い灯台。高さ20メートルの展望台から、広々とした太平洋を望見。午後には、創建717年という那古寺にも。境内から一望できる鏡ヶ浦（館山湾）を記憶にとどめ、ちょっぴり欲ばりなツアーに、皆さん満足の様子でした。

## 傘寿おめでとう

### ふる協、町会からプレゼント



ご夫婦で仲良く

今年80歳を迎える方に、富里地域ふるさと協議会（豊町東町会など7町会で構成）からお祝いのカステラがプレゼントされました。豊町東町会で該当する方は43人。町会からもお祝いのお茶を贈呈。9月15日に民生委員が担当地区のそれぞれのお宅を訪ねプレゼントの品を手渡して長寿を祝いました。

## 地域の歴史のDVDが完成

### 全世帯に配布しました

町会再編20周年企画として、豊町町会や地域の歴史をまとめたDVDが完成し、このほど全世帯に配布されました。このDVDの完成試写会を9月7日ふるさと会館で開催。豊小学校の大木恵子校長、福田裕司教頭、DVDのナレーションをお願いした同小前校長の池田真理子さんや、豊町東町会、豊町西町会の関係者、制作スタッフが参加。約50分の“わが町の歴史”を視聴しました。

「初の制作としてはコンパクトにまとまっている」「生活にかかわる写真や資料がもっとあれば」といった感想や意見が出ました。こんごも資料の発掘は続けて、より充実したものに補正していくことにしています。ご覧になった地域の皆さまにもぜひご協力をお願いしたいと思っています。



## ゴミ出しなどを有償で支援

### 布施新町の「支えあい」を取材



「健康長寿の町づくり」をめざす布施新町の取り組みを紹介します。同町は高齢者（65歳以上）が人口の50.1%（柏市全体では25.4%）

と過半数を超えており、在宅で過ごせるために、地域住民による生活支援の環境づくりが急がれる地域です。

平成28年6月、町会の役職経験者らを中心に、草とりやゴミ出しなどを有償で行うボランティア「布施新町支えあいネット」を立ち上げました。仕組みは①支援を希望する「利用者」が②「コーディネーター」（支援希望内容を検討し、料金の調整などを行う）に申し込み、コーディネーターの要請により③「協力会員」が作業を担当します。支援内容はゴミ出し、ゴミ当番代行、家屋内外の軽作業など。

現在、支援会員は38人、準支援会員（支援会員をカバー）10人、コーディネーターが6人。同ネットによると、支援の申し込みは、増えており、「地域の人なので安心」「業者よりきれいにやってくれる」とおおむね好評とか。「円滑な活動のためにコーディネーターの存在が欠かせません」と、ネット代表・山口正美さんは語っています。

## 募金活動が始まります

### 被災地支援にご協力を

年末恒例となっている「赤い羽根募金」（10月1日～11月30日）、「歳末助け合い募金」（12月1日～31日）が始まります。

町会では、町会費の一部をこれらの募金にあてています。また、夏祭り大会などのイベントでは、募金箱を置いて支援活動へのご協力を呼びかけています。



柏市を代表する野菜「かぶ」。生産量日本一として知られる「柏小かぶ」の歴史をたどると、その源流はわが町を含む「豊四季」にありました。

### ●大正中期、金町から導入



豊四季のかぶ栽培の始まりについては諸説ありますが、大正 10 年、「金町小かぶ」の産地として知られた東京府下の金町から導入されたと

思われます。大正 6 年の台風により、かぶ畑が水没。漬け物の原料として需要があったかぶの品不足を受け、当時開墾地だった豊四季で恩田藤一郎さんが栽培を始めたとされます。

最初は数人で始め、はじめてのことで苦労も多かったと思われませんが、火山灰の堆積でできた土壌がかぶ作りに適合したこと、連作がきくので年間数回もの収穫で量産が可能なこと、さらには初めての換金作物の栽培で農家の人たちが必死に研究に取り組んだこともあって、大正 8 年に 8.8 ヘクタールだったのが、昭和 8 年には 150 ヘクタールにも広がり、栽培農家も増えて「豊四季かぶ」として他の追随を許さないほどになります。

### ●牛車で千住の市場へ



町内のかぶ農家鵜澤彰さん(71)らが、戦前のかぶ作り農家の人たちから聞いた話を紹介してくれました。車などはなく、個人が牛車にかぶを

積んで、東京の千住の市場などに運んだといいます。疲れて牛車の上に寝ていると、牛が自宅まで無事送り届けてくれたとか。

かぶが導入される前は、麦や陸稲などを細々と作っていた農地。毎年麦わらを焼いて堆肥にしてきたのが幸いして、かぶ作りに向いた土壌になったのではと、皆さんは言います。

### ●いも作りで中断

戦争末期は食糧難から、主食となるさつまいも作りなどへの転換を余儀なくされ、かぶ作りは一時中断。昭和 25, 26 年ごろから復活しますが、ブランクを取り戻すのに 10 年ぐらいかかっ

たそうです。昭和 30 年代に入り、豊四季地区に加え、篠籠田、高田地区などにも広がり「柏小かぶ」として知られるようになります。

昭和 35 年ごろから、洗浄作業の効率化、結束機の導入、ビニールハウスの普及など次々と改良が重なって、栽培量、栽培面積も飛躍的に増えてゆき、「日本一」にまでのぼりつめます。

### ●年間を通して出荷

かぶは真夏を除いてほぼ年間を通して出荷されます。播種から発芽まで 1 週間から 10 日、その後 1 か月半から 2 か月で出荷可能な大きさに成長します。



出荷作業を見させていただきました。まず傷んだ葉を手作業で取り除くのですが、これが一番時間と苦労のいる作業。さまざまな大きさの穴が開いて板を使って、かぶの大きさをそろえます。サイズごとに束ねてプールへ。ベルトコンベア式の洗浄機で洗い、サイズごとに分けて箱詰めにして出荷という手順になります。

### ●成長を見るのが楽しみ



鵜澤さんは「かぶ作りはすごく簡単。でも、いいかぶを作るのはすごく難しい」と言います。「かぶはいつも 1 年生。毎年作っているの

に、年が変われば気象や播種の時期などによって、作り方をその都度考えるのです。子供を育てるのと同じで、成長過程を見るのが楽しい。これがかぶ作りの魅力かな。

都市化による農地の減少や、後継者不足などもあって、日本一の「柏小かぶ」の将来も決して楽観できないようです。この取材を通じ、昔、現在と問わず、農家の人たちのかぶに対する深い愛情と、いつも良いものを作ろうとする強い思いが伝わってきました。(かぶの歴史などは千葉県「千葉県野菜園芸発達史」、JA ちば東葛柏小かぶ共撰部会のホームページなどを参照。出荷作業の写真は鵜澤彰さん、松崎輝夫さんのご協力をいただきました)

### 『日本書紀』にも記述が

かぶの原産地はアフガニスタンからヨーロッパ南西部とされ、日本には大陸を経て、縄文時代から弥生時代にかけて入ってきたものとされています。8 世紀にできた歴史書『日本書紀』にもかぶの記述があり、古くから日本人に親しまれてきた野菜です。